

# 「のだ」の教え方に関する一試案<sup>(1)</sup>

庵 功 雄

## 1. はじめに

「のだ」は話しことばにおいても書きことばにおいても使用頻度が極めて高い形式であり<sup>(2)</sup>、日本語学でも膨大な量の研究がある (cf. 井島 2010)。しかし、学習者が使える形での記述は少ない。本稿では、産出につながる「のだ」の記述の試案を示したい。

## 2. 「のだ」の先行研究の問題点と本稿の提案

前述のように、「のだ」をめぐるには、三上 (1953) 以来数多くの研究があり、田野村 (1990)、野田 (1997)、名嶋 (2007) などで活発に議論が行われている。しかし、これらの日本語学の研究の大部分は、庵 (2011b) の用語法で言えば、「理解レベル」のものである。例えば、田野村 (1990) の言うように、「のだ」が「背後の事情を表す」ということが正しいとしても、日本語ではどういう場合に、「背後の事情」を述べなければならないのか、ということが明示的に示されていない限り、「産出レベル」の記述としては不十分である<sup>(3)</sup>。

一方、「のだ」に関する論文の中で学習者への説明を指向するものも数多くはないが存在する。菊地 (2000)、今村 (1996, 2010)、藤城 (2010) などである。これらは、「のだ」が使用される条件を学習者にイメージさせることを目指している点で、日本語教育のための記述として優れているが、記述が十分に操作的であるとは言いがたいところがある。例えば、今村 (1996) の「さじ加減」、今村 (2010) の「語りかけ度」、藤城 (2010) の「ドアのメタファー」などは魅力的な記述だが、疑問文や否定文で「のだ」が使われる条件は、そうした連続的な (continuous) ものではなく、離散的な (discrete) なものであると考えられることなど、「のだ」の記述としてはまだ詰めるべき点があると考えられる。

本稿では、「産出レベルの記述」としての「のだ」の用法の記述を行い、菊地(2006)で指摘されているような、「のだ」の不使用の問題の解決にもつなげたい。さらに、「のだ」との使い分けが問題になる「わけだ」「からだ」との異同も合わせて考える。以下、3では疑問文・否定文における場合、4では平叙文における場合について取り上げる。また、付論として、6において「のだ」の研究史における三上章の指摘の重要性について論じる。

### 3. 疑問文・否定文における「のだ」

本節では、疑問文・否定文における「のだ」について考える。疑問文・否定文の場合を平叙文の場合と分けて考えるのは野田(1997)の考え方を踏襲したものであるが、疑問文・否定文における「のだ」の使用動機に関する説明は野田(1997)とは異なる。

#### 3.1 疑問文における「のだ」——質問文の2類型——

野田(1997)は疑問文・否定文における「のだ」を「スコープの「のだ」」と呼び、平叙文における「のだ」である「ムードの「のだ」」と分けて考えることを提案している<sup>(4)</sup>。

論者も「のだ」の用法をこの2つの場合に分けて考えることには賛成するが、疑問文・否定文における「のだ」を野田(1997)のように、「スコープ」を広げるものとは考えない。それは、「スコープ」という考え方は言語普遍的に自明なことではなく、「どういう場合に「スコープ」を広げなければならないか」が明示されなければ「産出レベル」の記述としては不十分だからである(この点について詳しくは庵(2000)を参照)。

本稿では、疑問文・否定文における「のだ」を、その文に「前提」があることを示すマーカーとしてとらえる。一般言語学的に、疑問文は、1) その文の真理値を問う疑問文と、2) その文の述語は真であると認めた上でより詳しい情報を求める疑問文、とに分かれる<sup>(5)</sup>。そして、疑問文(・否定文)における「のだ」は、その文が2)のタイプのものであることを示すのである。例えば、(1)が「読んだ」か「読んでいない」か(文の真理値)を問うものであるのに対し、(2)は「読んだ」ことは真であると認めた上で、「日本語で」読んだのかどうかを問うものである。

(1) ビルさんは『1Q84』を読みましたか？

- (2) ビルさんは『1Q84』を日本語で読んだんですか？

### 3.2 否定文における「のだ」(「のではない」vs.「わけではない」)

否定文における「のだ」の機能も疑問文の場合と全く同様に説明できる。すなわち、否定文における「のだ」も、「述語は真であることを認めた上でそれ以外の部分を否定する」場合に用いられる。したがって例えば、(3)(4)で文の真理値は逆になる<sup>(6)</sup>。

- (3) 私は彼女と結婚しなかった。 (結婚しなかった)

- (4) 私は彼女が金持ちだから結婚したのではない。(結婚した)

否定文における「のだ」をこのようにとらえれば、「のではない」と「わけではない」の違いも容易に説明できる。すなわち、「のではない」は上記の通りであるのに対し、「Qわけではない」は、「 $P \rightarrow Q$ 」という推論は妥当ではないということを示す(Pは「Pからといって」という形で「Qわけではない」の前に現れることが多い)<sup>(7)</sup>。

- (5) リストラされて生活が苦しいからといって、盗みをしてもいいわけではない。

## 4. 平叙文における「のだ」

本節では平叙文における「のだ」(野田(1997)の「ムードの「のだ」」に相当)について考える。これは「理由・解釈」「言い換え」「発見」に分けて考えるとよい(より詳しい用法の分類については庵・高梨・中西・山田(2001)を参照されたい)。

### 4.1 理由・解釈を表す「のだ」(vs.「からだ」)

最初に「理由」を表す場合を考える。この場合は、原則として「からだ」も使える<sup>(8)</sup>。

- (6) 昨日は妻とレストランで食事をした。結婚記念日だったのだ (からだ)。

一方、「のだ」には状況の解釈を表す用法がある。この場合は、原則として「からだ」は使えない(cf. 久野1973, 白川2009)。

- (7) (デパートで泣いている子どもを見て) あの子、迷子になったんだ (\*からだ)。

#### 4.2 言い換えを表す「のだ」(vs. 「わけだ」)<sup>(9)</sup>

「のだ」には先行文(連続)の内容を言い換える用法がある。この用法では、多くの場合「わけだ」も使える<sup>(10),(11)</sup>。

(8) 彼は16歳から18歳まで英国で過ごした。英国の高校で学んだのだ(わけだ)。

#### 4.3 発見を表す「のだ」(「コト(情報)の発見」vs. 「モノの発見」)

「のだ」には次例のような「発見」を表す用法がある。

(9) (田中さんから届いた結婚式の招待状を見て)田中さん、結婚するんだ。

この場合、「発見」の対象になるのは「情報(コト)」である。「モノ」を発見した場合は、原則として「のだ」は使われない。

(10) (動物園で)あ、あそこにパンダがいる(?いるんだ)。

#### 4.4 モダリティ形式と共起する「のだ」

以上4.2, 4.3で見た用法の「のだ」にはモダリティ形式が後接する場合がある。この小節では、この用法について考える<sup>(12)</sup>。

##### 4.4.1 「のだろう、のかもしれない、のにちがいない」

この用法の意味は、「のだ+モダリティ形式の意味」と分析することができる。

(11) (彼の部屋の明かりが消えているのを見て)彼は出かけたんだ/んだらう。

例えば、(11)の「のだろう」の意味は「のだ+「だろう」の意味」と考えることができる。すなわち、この場合の「のだ」と「のだろう」の違いは(12)における「降る」と「降るだろう」の述べ方の違いに対応する。

(12) 明日は雨が降るの/降るだらう。

「のだ」に後接できる認識的モダリティは「だろう、かもしれない、にちがいない」に限られ、「はずだ、ようだ、らしい、そうだ」などは「のだ」に後接できない<sup>(13)</sup>。

(13) (出かけるとき道が濡れているのを見て)夜、雨が降ったのだらう/のかもしれない/のにちがいない/\*のはずだ/\*のようだ/\*のらいしい/\*のそうだ。

これは、「のだろう/のかもしれない/のにちがいない」が全体として、「ようだ

／らしい」などが表すような証拠に基づく推論 (evidentiality) を表すためである。

#### 4. 4. 2 「のではないか (んじゃないか)」

「のだろう」などと同様に「の」をとらえることができる用法に「のではないか」がある。「のではないか」は「のだ+否定疑問文の「ではないか」と分析することができる。聞き手に対する確認を表すと考えることができる。

例えば、(14) のような否定疑問文には「傾き (bias)」があり、(14) の話し手が「幹事は田中さんである」という判断をもっていることを表す (cf. 安達 1999) が、これは「幹事は田中さんだ」という話し手の判断に「ではないか」が付加されて、全体として判断を婉曲的に表現していると解釈することができる<sup>(14)</sup>。

(14) 幹事は田中さんではありませんか。 ↑

これは述語が名詞の場合だが、述語が名詞、ナ形容詞以外では「の」が必要になる。

(15) この本は田中さんが書いたものではありませんか。 ↑

この(15)では話し手は「この本は田中さんが書いた」という判断を持っている。それが疑いの余地がないものとしてとらえられていれば、「この本は田中さんが書いたのだ。」と述べることになるが、そこまで確信できない場合には「ではないか」が付与されると考えると、それはまさに、(14) が「幹事は田中さんだ」+「ではないか↑」という構造を持つのと並行的であり、4. 4. 1 で述べたことと全く同様に説明できる。

#### 4. 4. 3 「のか」

「の」を含む表現として同様に考えられるものに「のか」がある。「のか」の中でも疑問文の場合は3節と同様に考えればいいので、ここでは森山 (1992) が「疑問型情報受容文」として挙げる次のような「か」に対応する「のか」について考える。

(16) (時計を見て) もう9時か。

ここで取り上げる「のか」は4. 3で取り上げた「発見」の用法と関連が深い。例えば、テレビのニュースで台風が接近しているということを聞いたときの発話としては次の(17) a, bのいずれも可能である。

(17) a. 台風が来てるんだ。

b. 台風が来てるのか。

この場合、(17) bの「のか」は(17) aの「のだ」+ (16) のタイプの「か」

と解釈できる。(17)のような独り言の「納得」の場合は「のだ」と「のか」に特に差はないが、次例のように、相手から新規に情報を獲得したことを表す場合は「のか」はやや不自然になる。

(18) A : 洋子さん, 結婚するそうよ。

B1 : 洋子さん, 結婚するんだ/?のか。よかったね。

B2 : そうなんだ/?のか。よかったね。

## 5. まとめ——日本語教育文法に求められる記述とは——

以上, 本稿では「のだ」について, 「産出レベル」の記述を考える上で必要な要件について考えてきた。本稿の骨子をまとめると以下のようなになる。

1. 疑問文・否定文の「のだ」は, その文に「前提」があることを表す。
2. 平叙文の「のだ」は, 「理由・解釈」「言い換え」「発見」に分けて考えるとよい。
3. 「理由」の場合は基本的に「からだ」と言い換えられるが, 「解釈」の場合は原則として「からだ」は使えない。
4. 「言い換え」の場合は基本的に「わけだ」と言い換えられる。
5. 「のだ+モダリティ形式」のパターンで使える形式は「だろう, かもしれない, にちがいない」に限られる。これらの意味は「のだ+モダリティ形式の意味」として理解できる。
6. 「のではないか」は「のだ+(確認を表す)ではないか」と見なせる。

本稿の内容で「のだ」の全ての用法がカバーできたわけではない。今後解明しなければならない最も根本的な課題として, 日本語母語話者は, どのような先行文(連続)が来たときに, それに対する「理由」を述べたり, それを「言い換え」たりするのかという問題が存在する<sup>(15)</sup>。そうした問題を含め, 「のだ」に関する完全な記述を行うためには, 今後も地道な基礎研究を続けていく必要がある。本稿はそうした究極の課題の解決に向けての中間報告の意味を持つものである。なお, 本稿の内容に関連する問題について論じたものに庵(2013b)がある。また, 本稿の内容を教材として敷衍したものに庵・三枝(2013)がある。

本稿の内容には不備が残されているが, こうした記述を共有していくことが今後

の日本語教育の発展に少しでも資するところがあれば幸いである。そして、他の言語形式に関する同様の記述が日本語教育学会の大会において積極的に発表されることを心から祈念する。

## 6. 付論——「のだ」研究史における三上章の位置づけについて——

ここまでで、日本語教育文法としての「のだ」に関する議論は終わるが、本節では付論として、日本語学的な観点からの「のだ」の研究における三上章の知見の持つ重要性についての私見を述べることにしたい (cf. 庵 2003)。

三上が「のだ」について言及している部分は少ない。著書の中では三上 (1953) だけである。これはテンス・アスペクトや動詞分類などとも共通することであるが、その理由は三上 (1953) にある次の記述によるのかもしれない。

- (19) たゞいさゝかの自負を許してもらえば、これはともかくシンタクスの処女地に一步踏み込んだものである。それで、私が本書の後半で提出し解決に苦しんでいるような方向の問題に対して、多くの努力が払われるのでなかったら、日本文法はいつまでもでき上がらないだろうと思われる。問題の取り上げ方、その処理には、もっと違ったもっと優れた方法がありえよう。またそうでなくてはならない。しかし、問題の所在は本書にだいたい示したつもりである。これがそのような「問題の」一書として役立つことを切望するものである。 (三上 (1953: 後記)。下線論者)

さて、「のだ」であるが、周知のように、三上は「ガーノ可変」を根拠に、「のだ」を全体として1つの準詞として認定すべきであることを指摘した。これは「のだ」を研究対象として切り分けたという点で画期的なことであると考えられる。また、次の捉え方もその後の研究でよく引用されている (cf. 佐治 1981)。

- (20) この連体部分「何々スル」を既成命題とし、それに話し手の主観的責任の準詞部分「ノデアル」を添えて提出するというのが反省時の根本的意味だろうと思う。 (三上 (1953: 239))

それに比べて、次の2つの指摘はその後の研究でほとんど言及されていない。1つは「のだ」が持つテキストの機能である。三上は次のように述べている。

- (21) 「何々スル、シタ」の単純時に対し「何々スル、シタ+ノデアル、アッタ」を反省時と呼んで対立させる。英文法で単純時と組立の完了時とが対立して、結局広義のテンスが二々が四つになっているようにである。「ノ

「デアル」の機能はテンスばかりでなく、ムウ的なのもの、アスペクト的なものにわたっているが、名称としては便宜上テンス扱いにし、各テンスの条下にいろんな用法を説こうという計画である。（三上（1953：238））  
この部分を表にすると次のようになる。

(22)

	〈反省時なし〉	反省時現在	反省時過去
単純時現在	する	するのである	するのであった
単純時過去	した	したのである	したのであった

この「反省時」というのは、英文法の完了形にあたりと考えられる。(22) に対応する英語の語形を考えると次のようになるのではないと思われる<sup>(16)</sup>。

(23)

	〈反省時なし〉	反省時現在	反省時過去
単純時現在	(a)go	(b)has gone	(c)would have gone
単純時過去	(d)went	(e)had gone	

注(16) で見たように、形態論的パラダイムとしての(22)と「ムード<sup>(17)</sup>」の関係は完全に1対1ではないが、「のだ」をこのように形態論的に位置づけていることは、日本語における「ムード」研究上極めて重要な指摘であると思われる。

さらに、こうした「のだ」の位置づけを受け、三上は次のように「のだ」をテキスト論的に位置づけている。まず、「単純時」と「反省時」を次のように特徴づける。

- (24) 単純時：直接経験 — 報告 — 独立的 — 順  
 反省時：間接経験 — 解説 — 关系的 — 逆

この違いは三上（1953：241）が挙げる次の例を見るとわかりやすい。

- (28) 寺田は一代（女の名前）が死んでもまもなく史学雑誌の編輯を(a)やめさせられた。看病に追われて怠けていた上、一代が死んだ当座ぼかんとして半月も編輯所へ顔を(b)見せなかったのだ。寺田は又旧師に泣きついて、美術雑誌の編輯の口を世話して(c)貰った。編輯員の二人までが折から始まった事変に招集されて、欠員が(d)あったのだ。

（織田作之助「競馬」。表記は現代仮名遣いに直した）

この例の下線部（単純時）では出来事は時間通りに進んでいく。一方、破線部（反省時）はその時点での解説を表し、時間の進み方は逆になる。時間の進み方は次のように図示される。

(29)  $b \rightarrow a \rightarrow d \rightarrow c$

このことから「独立的」「関係的」ということもわかる。つまり、「のだ」は（多くの場合）前文に対するコメントを表すので、単独では存在し得ず、基本的に前文との関係の中で存在することになる<sup>(18)</sup>。そして、前文との関係の中で存在することから、テキスト内での表現効果として解説的というニュアンスが生じることになる。

こうしたテキスト内の「のだ」の機能はまさに工藤（1995）の言う「タクシス」そのものである。しかし、日本語学の研究史上、三上が工藤（1995）より40年以上前に「タクシス」に当たる概念を指摘していたことは庵（2003）を除いて全く指摘されていない<sup>(19)</sup>。三上が「のだ」に関して残しているこうした指摘にもとづいて「のだ」を考えていくことによって研究上の新しい観点が見出されるように思われる。

## 注

1. 本稿は2013年5月26日に2013年度日本語教育学会春季大会（於：立教大学）において口頭発表を行った内容に加筆修正したものである。なお、本稿は平成25年度～28年度日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究（A）「やさしい日本語を用いた言語的少数者のための言語保障の枠組み策定のための総合的研究」（課題番号25244022、研究代表者庵功雄）の研究成果の一部である。
2. 現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）のコアデータを対象とした悉皆調査である森（2011）によれば、「のだ」の出現頻度（「全体」の0.242%）は、「テ形」（同2.373%）、「中止形」（同0.451%）、「ようだ」（同0.253%）を除く全ての複文、モダリティ形式よりも出現頻度が高い。
3. 「日本語記述文法」と比較した際の「日本語教育文法」にとって「産出レベル」の記述が重要であるという点については庵（2011a, b）を参照されたい。
4. 厳密に言うと、「スコープ」か「ムード」かということと、疑問文・否定文か平叙文かということは独立のことがらであるが、ここでは議論を単純にするためにこのように述べることにする。
5. なお、疑問語疑問文は全て2)のタイプになる。この点についてはLyons（1977：757ff.）にも指摘がある。
6. なお、日本語では（2）に対応する場合に「の」で「スコープを広げる」ことが義務的だが、英語では必ずしもそうではなく、例えば、次例は結婚したかしなかったかで曖昧である（cf. Takubo 1985）。  
・I didn't marry her because she was rich.
7. 「わけではない」にはこれ以外に、次のような程度性に関わる用法もある（cf. 庵・高梨・中西・山田2001）。

・私は映画が特に好きなわけではない。

8. 厳密に言えば、「理由」であることを表すものとしては「からだ」のほうがふさわしいので、産出レベルの記述にとっては、「理由」を表すものの中で「からだ」ではなく「のだ」を使わなければならない場合を特定し、それ以外の場合は「からだ」でかまわないという形で記述することが必要であるが、論者にはまだそうした記述のための用意がない。

9. 本稿では、「のだ」を産出レベルから記述することを目指しているが、「のだ」は理解レベルの問題としても日本語教育において重要なものである。特に、ここで扱う「言い換え」は日本語力がまだあまり高くない学習者にとっても極めて有効な読解上のストラテジーとして利用可能である。つまり、「のだ」が付いている文があれば、その文はその前の文（連続）に関する「言い換え」になっている可能性が高いので、「のだ」が付いている文が理解できれば、その前の部分が正確に理解できなくても論旨は押さえることができるのである。例えば、次例では「のだ」を含む(a)文の内容が理解できれば、それに先行する波線部の内容が理解できたことになるのである。

・一方、ヨーロッパ人に対して、三日間だけ、一年間だけががんばれといっても効果はすくない。「瞬間」に生きるということはヨーロッパ人の夢ではあったが、壮大な長期目標がないと元気が出ないというのがヨーロッパ人、つまり外側を向いている人間の弱さである。マラソン選手の人間は短距離競走に向かない。だが、精神力は体力とはちがう。(a)短期決戦をたくみに継続させる方が長期計画的持久戦にまさることが現代社会では多いのである。日本人にはこういう形でしか変化に対応できないし、その点ヨーロッパ人とは逆の長所があるともいえそうである。 (会田雄次『日本人の意識構造』)

読解教育としては、読解に入る前に、学習者に「のだ」（および、それと類似の機能を持つ「わけだ、つまり、すなわち、要するに」にマークを付けさせ、上記のような「言い換え」の機能を利用した読解ストラテジーを教える。この際、「のだ」の使い方が巧みである文章をいくつか用意しておき、そうした文章を用いて練習するとよい。作文では、この逆のプロセス、すなわち、先行部分の内容が読者にとってわかりにくいと判断したときに「のだ」（や「わけだ」など）を付けるのだということを説明する。このような手順を踏めば、「のだ」を過剰使用したり全く使わなかったりするということもかなり軽減できるのではないかと思われる。

10. 「のだ」と「わけだ」の使い分けについては庵・高梨・中西・山田（2001）を参照。

11. 「理由・解釈」「言い換え」という平叙文の「のだ」の基本用法がわかった段階で、3. 1節とは異なるタイプの疑問文について見る必要がある。例えば、次例では3. 1節の内容からすると、「のだ」が使われないはずの場合に「のだ」が使われている。

・田中さんは大学生なんですか？

この文が適切な文として解釈されるのは、これが「解釈」を尋ねる文である場合である。例えば、「田中さん」が年配の人であることがわかっている場合はこの文は自然である。逆に言うと、この文はそうした解釈を誘発するので、そうした解釈ではない中立的な場合は「のだ」を使ってはいけぬ。学習者は、この文の使用が適切になるような文脈を表すことを意図していないにもかかわらず、「のだ」の使い方を間違えたために聞き手にとって不愉快な意図を伝えてしまうことがある。特に、述語が形容詞、名詞の場合はそうした可能性が高いので注意が必要である。

12. この小節の内容はそれ自体では不完全である。つまり、例えば、仮に「のだらう」が

「のだ+だろう」であることがわかったとしても、「のだ」を使うべき条件（「のだ」の産出条件）が明らかにならないかぎり、「のだろう」の産出のための十分条件は依然として明らかになったとは言えない。しかし、「のだ」の産出条件がほとんど明らかになっていない（というよりも、「のだ」に関する研究において、このことが最も重要なリサーチクエストであるということすらほとんど意識されていない）現状では、まずこの小節の内容を第一歩として研究を進めていくしかないと考える。

13. 「のはずだ、のようだ」は名詞に後接する場合は可能だが、それ以外の品詞では不可能である。

- ・彼は来週帰国のはずだ／のようだ。
- ・彼は来週帰国する\*のはずだ／\*のようだ (ok のだろう／ok のかもしれない)。

14. この場合の「ではないか」が婉曲を表すことは、この用法の「ではないか」が常に上昇調のイントネーションを伴うことからわかる。一般に、上昇調は聞き手への配慮を表し、丁寧さ (politeness) を表す (cf. 井上 1997)。一方、上昇調を伴わない「ではないか」の丁寧さは低い。

- ・君は幹事は山田さんだと言っていたけど、幹事は田中さんじゃないか。→  
なお、この用法の「ではないか」は田野村 (1988)、三宅 (2011) の「デハナイカⅡ類」に相当する（この注の例文の「ではないか」は「デハナイカⅠ類」に相当する）。

15. ただし、これはこれまでの「のだ」に関する全ての研究にとっても同様に未解決の課題である。

16. 実際は、「のだった」には3種類ある (cf. 庵 2006)。

- ・A：太郎はひたすら {働く／働いた} のだった。(語り物の「のだった」)
- ・B：{来週彼に会う／先週彼に会った} のだった。(再発見の「のだった」)
- ・C：あそこは2二銀と {指す／\*指した} のだった。(反実仮想の「のだった」)

(cf. 寺村 1971=1984)

このうち、Aでは「のだ」がほぼ同じ意味で使える。一方、BとCでは「のだ」は使えない (Bで「のだ」にすると、「発見」になり、「再発見」にはならない)。このうち、Cは英語で言えば、仮定法過去完了に当たる。(22)(23)との関連で言えば、英語の仮定法になる場合、「のだった」の前ではテンスの対立が中和するので、仮定法過去完了になるのは「したのだった」ではなく「するのだった」になる。なお、仮定法過去は「のだ」では表せず、「ている」を用いる必要がある。こうした「ている／ていた」を用いた仮定法 (接続法) については庵 (2001, 2013a) を参照されたい。

- ・今お金があったら、あのカメラを買っている。(仮定法過去)
- ・あの時お金があったら、あのカメラを買っていた。(仮定法過去完了)

17. ここで言う「ムード」は三上が言う「ムウド」(これは基本的に寺村秀夫氏や80年代の日本語学の文献における使い方と同様で、現在の「モダリティ」に当たる)ではなく、「直接法」「接続法」などと言うときの「法」に当たるものである。日本語学における「ムード」という用語の使い方に関する問題点については庵 (2013a) 参照。

18. こうした「のだ」の機能が野田 (1997)、庵・高梨・中西・山田 (2001) で言う「関連づけ」である。

19. これに関連して、有標の認識的モダリティ形式が持つタクシスの機能について論じた仁田 (1996) も参照されたい。

20. \*をつけた論文は全て一橋大学の機関リポジトリからダウンロードできる。

### 参考文献<sup>(20)</sup>

- 安達太郎 (1999) 『日本語研究叢書 11 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 庵功雄 (2000) 「教育文法に関する覚え書き——「スコープの「のだ」を例として——」  
『一橋大学留学生センター紀要』3, 一橋大学\*
- 庵功雄 (2001) 「テイル形/テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4, 一橋大学\*
- 庵功雄 (2003) 『『象は鼻が長い』入門——日本語学の父三上章』くろしお出版
- 庵功雄 (2006) 「モダリティ形式のタ形に関する一考察」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編  
『日本語文法の新地平』くろしお出版
- 庵功雄 (2011a) 「日本語記述文法と日本語教育文法」森・庵編 (2011) 所収
- 庵功雄 (2011b) 「「100% を目指さない文法」の重要性」森・庵編 (2011) 所収
- 庵功雄 (2012) 「日本語教育における「文法」を問い直す」『Romazi no Nippon』663\*
- 庵功雄 (2013a) 「現代日本語における「ムード (接続法)」を表す表現に関する研究 (その1)」第125回関東日本語談話会発表要旨
- 庵功雄 (2013b) 『日本語教育, 日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵功雄・三枝令子 (2013) 『上級文法演習 まとまりを作る表現——指示詞, 接続詞, のだ, わけだ, からだ——』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井島正博 (2010) 「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』6, 東京大学
- 井上優 (1997) 「「もしもし, きっぷを落とされましたよ」——終助詞「よ」を使うことの意味——」『月刊言語』26-2, 大修館書店
- 今村和宏 (1996) 「論述文における「のだ」文のさじ加減」『言語文化』33, 一橋大学\*
- 今村和宏 (2010) 「「のだ」の発話態度の本質を探る」『一橋大学留学生センター紀要』10, 一橋大学\*
- 菊地康人 (2000) 「のだ (んです) の本質」『東京大学留学生センター紀要』10, 東京大学留学生センター, 東京大学
- 菊地康人 (2006) 「受難の「んです」を救えるか」『月刊言語』35-12
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス形式とテキスト』ひつじ書房
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 佐治圭三 (1981) 「“のだ”の本質」佐治圭三 (1991) 『日本語文法の研究』(ひつじ書房) に再録
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』164
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法(1)「のだ」の意味と用法』和泉書院

- 寺村秀夫 (1971) 「‘た’の意味と機能」寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版に再録
- 名嶋義直 (2007) 『日本語研究叢書 19 ノダの意味・機能』くろしお出版
- 仁田義雄 (1996) 「第 10 章語り物のモダリティ」仁田義雄 (2009) 『仁田義雄日本語文法著作選第 2 巻 日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房に再録
- 野田春美 (1997) 『日本語研究叢書 9 「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 藤城浩子 (2010) 「ノダの提示法に関する一案」『日本語／日本語教育研究』創刊号, 日本語／日本語教育研究会
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版から再版 (1972)
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 森篤嗣 (2011) 『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』コアデータにおける初級文法項目の出現頻度』森・庵編 (2011) 所収
- 森篤嗣・庵功雄編 (2011) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 森山卓郎 (1992) 「疑問型情報受容文をめぐる」『語文』59, 大阪大学
- Lyons, John (1977) *Semantics* 2. Cambridge University Press.
- Takubo, Yukinori (1985) “On the scope of negation and question in Japanese” 田窪行則 (2011) 「第 3 章 日本語における否定と疑問のスコープ」『日本語の構造』くろしお出版として再録